



サンノゼからのたより

2024年 聖霊降臨後第10主日

謙遜の徳について



親愛なる信徒の皆さん

聖霊降臨後第10主日

今日の書簡で聖パウロは、多くの賜物を数え上げた後、かの有名な言葉で締めくくっています。「愛がなければ、無に等しい。」(Iコリント 13:2) このように愛はカトリック精神の常に主要な美德です。

今日の福音では、ファリサイ派の人々の自尊心について書かれていますが、中には理解しがたいものもあって、そのために誘惑の魔手が立ち現われ、善の意志を持った人々にも影響を与えるほどなのです。それは *scrupulosity* (疑念を持つこと、几帳面さ) への誘惑です。

Scrupulous はラテン語で「小さな石」を表しており、最初は小さいけれど、大きな重みを持つものにもなり得るのです。これを精神生活に当てはめると、人は罪の重さを必然的なものとして背負わされ、疑念が絶えず人に重くのしかかってくるのです。

疑念に対して几帳面な人は、罪が全く無いか、過度に疑い深く人生を送ることで罪を軽くするか、という視点で慢性的に罪を見る傾向があります。その人は自問自答せずにはおられず、それによって神を怒らせるようなことをしているかも知れないという思いで立ちすくんでしまうのです。あらゆる妄想は人間の思考の中に住み着いています。人間性に対する敵は、いつも「光の天使」(IIコリント 11:14) を装って、几帳面な人を誘い出し、罪を犯すことに消極的であることは賞賛に値するし、その意志は賞され守られるものだ、と考えさせるのです。しかし無意識に全規則を多分厳格に守ってはいるけれど、内面は冷たく、喜びを感じていないことがその内分かってきます。

その人はこうであるべきという像に自分を一致させたいと願い、理想的人物を熱心に求めます。しかしそれはイエスがそのままの姿を愛してくださっているという事実を見失うことです。これは明らかに何か障害に対して疑念を抱く自由の欠如からくるものです。一度神の愛に確信が持てなくなると、人は内向きになり、神の光に従うことなく自分自身を綿密に調べよう

とします。このように内面を見つめることで、心からイエスに身を任せることができなくなり、それによって必要とされる救済関係が危険にさらされることになるのです。

そんな自己陶醉に対する解決法は、キリストに、またキリストや聖人たちとともに活躍している人たちに、目を向け直すことです。

福音の中でイエスは言われました。「この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさと分かる。」(ルカ 23:47) なぜなら愛には多くの罪を免除し、神との友情を取り戻す力があるからです。

一方で世の多くの人には罪の意識が希薄になる傾向があり、自分の悪事はめったに認めない代わり、他人や制度、社会構造のせいにしがちです。今日の福音で、イエスは私たちが真似をするにふさわしい人物をあげています。「徴税人は遠くに立って、目を天に上げようとせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人とわたしを憐れんでください。』言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」(ルカ 18:13,14)

謙遜の美德が神の愛に包まれて成長していくことができますように。アーメン

キリストの内に

司祭ラファエル植田

ラファエル植田勝行神父の米国での住所

Immaculate Heart of Mary Oratory

司祭館：4467 Illsley Ct. San Jose, CA, 95136

聖堂：1101 S. Winchester Blvd. San Jose, CA 95128

王たるキリスト宣教会のホームページ <<http://icrsp-jp.org>>

Email: ihm.sanjose@institute-christ-king.org

